St. Luke's International University Repository

あのときの一言で振り返る私の看護史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高井, 今日子, Takai, Kyoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014970

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―― シンポジウム ――

あのときの一言で振り返る私の看護史

高　井　今日子[1)]

看護職として個人の生涯発達を振り返ったとき，時の流れとともに経験した出来事とその場面場面で人々と交わしたさまざまな言葉が思い出される。看護管理の実践者として，研究者の一人として現在に至るまでに行ってきた意思決定を再考し，思い出されたいくつかの言葉から私の看護職としての生涯発達を記述する。

1．看護職業人としてのスタート

- 1984年　聖路加看護大学入学
- 1987年　交通事故で入院，2カ月の患者体験
- 1989年　新人看護婦として聖路加国際病院外科病棟に就職
- 1990年　プライマリーナーシングを通して個々の患者への看護を再考
- 1991年　プリセプターとしてスタッフ育成に本格的に参加

高校卒業時，看護婦という仕事に興味をもち知人の勧めで日本看護協会を訪れ，看護婦になることを相談したところ大学進学を強く勧められ，聖路加看護大学に進学した。大学卒業後の職場として聖路加国際病院を選択したのは，学生時代の実習経験はもちろん自分や家族の入院体験から，自分の実践したい看護ができる職場はこの病院であると強く感じたからであった。

1）「高井さんって変わってるわね」

就職後初めて上司と面接したとき，職場での感想を質問され，「毎日楽しいです」と答えた私に上司が言った言葉である。「つらい」「たいへん」と返答する新人が多いなか，さまざまな知識や技術を習得し少しずつでも一人前になっていくことを楽しいと答えた私が少し変わっていると感じたそうである。変わっているという評価はともかく，社会人としてこの職業・職場を選んで正解だったと感じたこのときの思いは，その後後輩の指導を実践するたびに同じ思いを彼女たちがもつことができることを一つの目標とするきっかけとなっている。

その後，聖路加国際病院に定着し始めていたプライマリーナーシングを通して患者一人ひとりに適した看護の提供，そして新人看護師教育においてプリセプターという役割を果たすことによるスタッフ育成の実践を学んでいった。

2．組織の目標に関する認識，リーダーシップの自覚

- 1992年　新病院開設。新しい上司のもと副婦長就任。組織の構築のサポート。管理職としてのスタート
- 1993年　看護部長の交代。組織再構築のスタート
- 1994年　院内教育プロジェクトなどへの参加。看護管理部・院内他部門との関連業務への参加
- 1995年　地下鉄サリン事件。その体験から日本看護協会で他施設の看護職との出会い

1）「みんな，ついてくるわよ」

4年目になった春，新病院が完成し病棟を異動することとなりそれまでとは違う上司と新しい組織の構築にかかわることとなった。その年の秋，彼女から「副婦長をやってみない？」と声をかけられた。初めての管理職に就くという期待よりも，私には他のスタッフが自分をリーダーとして認めてくれるのかという不安が強かった。そのことを上司に打ち明けると彼女はこう答えたのである。共にいくつかの困難を乗り越えてきた彼女の言葉でさらに病棟を充実させることが共通の目標となり，副婦長に就いた。そしてリーダーシップを自覚するスタートとなったのであった。

2）「看護婦さんってあなたにぴったりの仕事よね」

副婦長になった頃，高校時代の友人たちからの言葉である。管理者としてスタートした私は「彼女たちが想像する看護師像とはずいぶん違うことを私はしているのだろうなぁ」と感じた。彼女たちの看護職のイメージはおそらく白衣で患者をケアする姿であり，組織のなかで四苦八苦する管理者や新しい知識を追及する研究者の姿ではなかったであろう。しかし，このとき彼女たちとは別の意味で，常に新たな知識と技術の習得をめざす看護職は好奇心旺盛な自分にとって別の意味でぴったりの職業だと私は再認識した。

この頃，地下鉄サリン事件の経験から院外の看護職と日本看護協会での仕事を協働する経験をもった。この頃から病院という一つの組織のなかに存在するだけの看護職でなく，社会のなかに存在する看護職を強く意識するようになっていた。

1）聖路加国際病院，聖路加看護大学大学院後期課程

3．管理職として，そして次のステップへ

- 1997年　婦長就任。さまざまな業務への戸惑い
- 1998年　組織の変革。変化に合わせた組織の再編成
- 1999年　研究・調査への参加。看護職業人の新しい役割
- 2000年　キャリアアップ・進学か配置転換の検討
- 2001年　キャリアアップの準備。受験と後任者の検討

1）「どうして管理者になることを決心できたんですか？」

スペシャリストをめざすか，上司の勧めで管理職に就くか悩んでいた後輩からの質問である。臨床経験3年半で副婦長になるときには私も悩んだ。しかし少なからず管理の経験を重ねた私は彼女に次のように答えることができた。「病院という組織において看護や医療を提供することは一人の人間だけでできることではない。1日24時間，1年365日質のよいサービスを提供するためには協働，そして組織の管理が必要なはず。ならばよりよい看護サービスを提供するための管理者の一人に私はなりたいと思ったから」と。

多くの看護管理者の先輩から影響を受け，私は二交代制の導入や業務改善，スタッフ育成など組織の運営と変革に携わった。また看護部教育プロジェクトやクリティカルパス作成への参加では他部署や他部門との交流を深め，日々の業務につながる関係性を築いた。さらに院外の看護職との研究活動が看護管理の研究への興味をより膨らませてくれたのである。

2）「看護管理の単位は5年です」

この言葉は1993年，井部俊子前看護部長が就任時初心表明のなかで語った言葉である。婦長になるとき，私はこの言葉を意識し5年で自分の組織構築を完成できれば，そして自分のキャリアに何らかの区切りをつけようと意識して過ごしてきた。そのときが近づいたとき，さらに自分の看護職としての実践を強化するためには知識の探求が必要と考え進学という道を選んだ。

4．研究そして両立

- 2002年　聖路加看護大学大学院前期課程入学
- 2003年　修士論文作成。新しい視点からみた看護職のパワー
- 2004年　聖路加国際病院復職・大学院後期課程進学。新しい組織の管理への参加・仕事と学業との両立
- 2005年　充電？　停滞？

1）「あなたはどうして看護職のもつパワーに興味があるんですか？」

修士課程2年のとき，指導教授から私の研究テーマに関して投げかけられた言葉である。それまでの経験から看護職はめざす目的を達成するためのパワーをもっていると実感していたが，多くの場面でそれが十分に発揮されていないというジレンマもあった。5年間の婦長経験に区切りをつけ進学したのはそんな現状を見つめ，打破するための知識がほしかったからである。そして，教授からのアドバイスを受け，看護職のパワーを追求するためのフィールドとして選んだのは慣れ親しんだ臨床の場ではなく，日本の社会を動かしている国家政策という場であった。この研究過程を通して私は日本の社会における看護・看護職の存在を常に意識するようになった。

2）「（臨床）現場に戻って働くのになぜ博士課程にも進学したの？」

政策という臨床現場からは注目することのなかった領域の知識を新しく得た私はこの双方の関係を常に意識し活動できる看護職になりたいと思い始めた。そして，修士論文作成の段階で，休職していた職場への復帰と博士課程への進学を両立させることを決心したのである。臨床での実践と研究は確かに難しい。また，この言葉のように双方をする意味があるのかと感じる人も多いだろう。しかし，修士課程で得た知識を看護界でさらに活用していくには現場にいて，さらに研究によって知識を確立することが私には必要だと考えたのである。そんな看護職が現場にいても悪くない，いやいることが有用である存在になりたいと。

3）「両方ってたいへんですよね」

臨床での管理職と博士論文のための研究を実践する学生という二足のわらじを履いてから常に言われ，自分自身も時間的に体力的にそう感じることも多い。しかし精神的な苦痛はいわれるほどはなかった。焦る気持ちはある。しかし，現場で困難な状況に立たされたとき自分の得た知識が活用できたり，同僚に得た知識を提供し共にディスカッションして次のステップに進むこともできた。研究テーマである政策を考えるとき，看護サービスが提供される現場にいることで患者が，そして社会が求める看護を確立するための研究の必要性を常に感じられることも自分にパワーを与えてくれている。

めまぐるしく変化する環境のなかで私の看護職としての生涯発達はまだまだ過渡期にある。今回振り返った経験のなかで得たものは大きく，それを基礎に今後もさまざまな人とのかかわりを通して次の私に発達していくことは楽しみである。